

第 34 回日本英語学会挨拶

平成 28 年 11 月 12 日
金沢大学角間キャンパス
金沢大学教育担当理事・副学長
柴田正良

ただいまご紹介に与りました、金沢大学の教育担当理事・副学長をしておりませぬ柴田と申します。

この度は、第 34 回日本英語学会を、この山深い角間のキャンパで開催して頂き、まことに有り難うございます。

英語学会ということで、英語で挨拶しなければならないのかと悩んでおりましたところ、昨日、会長の大庭先生より、「日本語でもいいですよ」とお許しを頂きましたので、小生も、はなはだ怪しい英語を喋らずにすみしました。

ご配慮、有り難うございます。

このようなアカデミックな学会で、アメリカの大統領選挙のことを口にするのはいささかマナー違反かもしれませんが、しかし、イギリスの EU 離脱に続き、それよりも衝撃の大きかった「英語の故国 native land」でのこの異変は、逆に、学問の世界で果たされてきた英米文化圏の役割の大きさを再認識させてくれたように思います。

実は、私は、分析哲学という、もっぱら英米系で議論されている現代哲学の一分野を研究しております、そのカバーする分野の中には、言語の哲学や心の哲学があります。ひょっとすると、みなさんの中にも、ジェリー・フォーダーやドナルド・ディヴィッドソンという哲学者の名前をご存じの方もいるかもしれません。前者のフォーダーの著作『意味の全体論』(*Holism*) は、縁あって、私が翻訳しましたが、いわゆる意味論における全体論 semantic holism を批判的に論じたものでした。

そのころ、過去の哲学者の細かい解釈ばかりを議論する日本の哲学界にうんざりしていた私には、英米系の哲学の議論はまことに新鮮に感じられました。(実際、日本の哲学はこのままでは未来がないですね)。それに対して、分析哲学系の議論には、自由な発想、開かれた思考、オリジナリティの尊重といったものがあり、それは、漠然としてではありませぬが、英語圏の文化全体との価値

の共有であったように思います。

そして、その底には、うまく言えませんが、英語圏全体の価値観を支える「明るく前向きで、自由でリベラルな民主主義」が流れていたように感じています。

ところが、次期のアメリカ大統領となるトランプなる人物は、それとは相容れない人種差別主義、白人至上主義、女性蔑視、排外主義、反民主主義を標榜しているように見えます。

それが、戦後のアメリカの理念の対極に位置していることは、1961年のケネディの大統領就任演説と比べてみれば一目瞭然です。そこではこう宣言されています。「我が国に好意を抱こうと悪意を抱こうと、すべての国に告げよう。われわれは自由の存続とその成功を確保するためなら、いかなる代償をも支払い、あらゆる重荷をもいとわず、どんな困難とも対峙し、あらゆる友人を助け、いかなる敵とも対決する決意である、と。」

「自由」、それはまさに、われわれの知的営みの必須の土壌ではないでしょうか。

少し偉そうな言い方になって申し訳ありませんでした。もうここで、ご挨拶を終わりにいたします。

それでは、最大限の自由の下で、どこまでも真理を探究する、それがこの学会においても見事に果たされることを祈念して、私の挨拶とさせていただきます。